

韓服の特徴と韓国伝統織物の韓山モシの技術伝承

Characteristic of Korean traditional clothes and Technical succession of Hansanmosi which is a Korean tradition ramie fabric

林 在圭

文化政策学部国際文化学科

Jaegy LIM

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

人間の暮らしにとって衣食住は根幹をなすものである。ここでは、特に「衣」に焦点を当てて韓国服飾の伝統とその特徴についてみる。そこで、韓国の伝統衣裳の現状を知るために忠清南道舒川郡韓山の苧布の韓山モシを取りあげる。韓山モシは夏用の高貴な織物の生地で、伝統的に主に舒川郡一帯の韓山で生産されている。ところが、化学繊維の普及と増大によって苧麻栽培は激減し、韓山モシは壊滅的状況に追い込まれた。そのため、1980年代半ばに伝統文化復活の一環として、地方行政の舒川郡や国が韓山モシの保存・継承のために力を注いでいる。そして、1990年代には韓山モシ館を建立し、さらに2000年代に入ってから韓山モシ世界化事業団を組織化して、その復興に努めている。

The food, clothing and shelter are like the root for a human living. Here I focus on particularly "clothes" and try to be assigned to a tradition and a characteristic of the Korean clothes. Therefore I take up the case of Hansan mosi ramie fabric to know the present conditions of Korean traditional clothes. I studied the case of the Hansan mosi ramie fabric from Hansan in Seocheon-gun, Chungcheongnam-do, South Korea. Hansan mosi is an elegant fabric for summer apparel and was traditionally produced mainly in Hansan in the whole Seocheon-gun area. With the introduction and spread of the use of synthetic fibers, however, areas for growing ramie were greatly reduced, and the Hansan mosi fabric industry deteriorated. In the middle of the 1980s, however, as part of their initiatives in restoring cultural traditions, the national and the local Seocheon governments introduced programs on preserving and continuing the production of Hansan mosi. In the 1990s, they established the Hansan Mosi Fabric Hall, and in 2000, they organized an agency for promoting Hansan mosi fabric.

はじめに

人間の暮らしにとって衣食住は根源的な根幹をなすものである。したがって、その変遷をたどることは人間生活史そのものをたどることにもなる。時代の流れのなかでその民族の伝統的な固有性を保ちながらも、最も外来文化の影響を受けやすいのも衣食住である。しかしこの変化の過程も、民族や社会によって大いに異なる。たちまちのうちに外来文化を受容し、それに同化していく民族もあれば、徐々に受容して自国のものに同化させていく民族もある。また最初はこれをかたくなに拒否し、後に元の形がわからないくらいまで変容してしまう民族もある。

韓国では近代化のなかで、多くの伝統的な民俗文化が変容を強いられてきた。そうした変容のなかには、めんめんとして受け継がれつつ漸次変化しているものもあれば、いったん消滅した後で復興したものもある。そして、その変化過程は、特に6.25戦争(朝鮮戦争)後の1960年代に入り、産業構造の変動や都市化の進展、大規模な地域開発の影響の下、さまざまな様相を呈している。ここでは、衣食住のうち、特に「衣」に焦点を当てて、韓国服飾の伝統とその特徴について考察する。そして、さらに韓国の伝統服飾の現状を知るために「韓山モシ」と呼ばれる苧布の伝統織物を取りあげる。

韓国では織物生産の分野における衣料復興の試みが国や地方行政の主導のもとに推しすすめてきた。地元素材の再評価(地産地消)については、「食」の分野や「住」の分野では多くの関心が払われている。しかし広義の「衣」にかかわる衣料生産の分野に関しては、学術的にはそれほど関心が払われているとはいえない。

1960年代以降の輸出志向型の工業化のなかで、伝統と西洋式の服制の二重構造が形づくられ、近年その変化様態も複雑で多岐にわたってきた。伝統的に最高の衣料は絹とされていたが、夏の衣料としては韓国固有の民族衣装の「白衣」を象徴する苧布が重宝され、古代より中国や日本への輸出品の筆頭に数えられてきた。忠清南道舒川郡では、かつてより農業の複合経営における米に次いで重要な一角を担ってきたのが苧麻(「モシ」と呼ぶ)の栽培であり、苧麻を織った苧布(苧布も「モシ」と呼ばれる)の織物であった。1960年代以後、化学繊維に押されて急減し、国では伝統の復活・伝承のために重要無形文化財に指定し、観光化の一環として保全・伝承をはかっている。

ここでは、苧布の伝統復興を地域アイデンティティ形成のひとつの柱に据えている忠清南道舒川郡の「韓山モシ」をとりあげ、その現状と伝統織物の技術伝承について考えることにしたい。

1 韓国服飾の形態的特徴

韓国民族(中国の「漢民族」に対して、韓国民族は「韓民族」と呼ぶ)の固有の服飾は、柳喜卿・朴京子著の『韓国服飾文化史』(源流社、1983)によると、「襦(ユ)・袴(コ)と裳(サン)・裙(クン)・袍(ポ)を中心にして、冠帽(クワンモ)・帯(テ)・靴(ホァ)または履(リ)」が加わったものが基本型であるという。これは騎乗に都合の良い北方の胡服系統に属するものである¹⁾。

襦(ユ)は、今日の「チョゴリ」と呼ばれる上半身に着る上衣であり、元来は男女の区別がなく、ただ袖の飾り模様である褌(セン)²⁾が違うだけである。そして、

4～7世紀の身分制度が厳格になってきた集権的王国時代（高句麗・百濟・新羅の「三国時代」と呼ぶ）になると、外衣・內衣ともにそれぞれの男女服の形が確立される。三国時代の襦は丈の長さが、今日のチョゴリよりも長くお尻まで届くもので、腰には帯をしめていた。高麗時代（918-1392）末期になると、蒙古の影響を受け襦の丈が短くなり、帯をしめる代わりに結び紐³⁾をつけるようになる。そして、袖下は直線から曲線へと変化する。

袴（コ）は、現在の「パジ」や「コイ」と呼ばれる下にはく幅が広い下衣のズボンである。袴は用途によって、幅と長さが異なる。袴は防寒と騎馬に適したものととして発生した北方遊牧民の影響が強く、韓国民族の固有の衣服のひとつとなっている。また袴は『三国史記』⁴⁾の「色服條」によると、婦人服の中にも記述されており、袴は男女とも区別なく着ていた。しかし、婦女子は袴の上に後述の裳（サン）を重ね着することもあったが、袴は必ず着るという着袴が基本服制となっていた。裳を着るのは、中国または南方系の影響によるもので、儀礼的な機能をもっていたのが、やがてこれが一般化したのではないかとみられている。男性のズボンのパジは形態的には昔も今も変化は認められないが、朝鮮時代（1392-1910）には幅が広くなったり狭くなったりする⁵⁾。女性のパジは肌着化するが、近代化とともに再び表に着るものとなってくる。

裳（サン）は裙（クン）の原型であり、今日の「チマ」と呼ばれる下に着る下衣のスカートである。なお、裙は腰より下に着る幅が広くて、長いスカートの様に見えるズボンである。三国時代までの裳は女性専用のものであった。しかし、統一新羅時代（676-935）になると、唐の服飾制度を導入し、男性も上衣下裳のチョゴリとチマがくつしたものを着るようになる。朝鮮時代にも国王をはじめ、文武官吏が礼服時に裳を着用した。裳の形態は時代や性別によって異なるが、今日のような形は朝鮮時代に確立された。女性の普段着としては「短チマ」と「長チマ」があって、礼服としては「膝襪チマ」と「大襪チマ」に大別される。短チマは庶民や賤民のみが着るもので、長チマは庶民や両班層の女性も着るが、礼服としても用いられた。他方、小礼服の膝襪チマは飾りの膝襪段を一段、大礼服の大襪チマは飾りの膝襪段を二段、それぞれチマの下端につけたものである。

袍（ポ）はパジ・チョゴリの上に着る外衣で、洋服の外套に似て足首まで長いものであり、儀礼と防寒のために男女とも着用していた。袍には襦と同様に襟がつけられ、腰には帯をしめる。本来、身分や階級を問わず着用していた古代の袍は防寒の目的であったが、やがてその機能は儀礼的な目的へと変化した。そのため、普段は襦と袴、すなわちパジ・チョゴリだけを着用していたのである。韓国固有の伝統衣裳（民族衣装）の「韓服」といえば、「パジ・チョゴリ」あるいは「チマ・チョゴリ」と呼ばれる（写真1）。

ところで、袍は時代の変遷とともに上衣下裳式の「帖裏」（チョルリック）から、明の影響を受けて「直領」（チクリョン）へと変わり、豊臣秀吉による朝鮮出兵の壬辰倭乱以降は「道袍」（ドウポ）へ、さらに「斂衣」（チャ

ンイ）へと変わり⁶⁾、やがて朝鮮時代の末期になると、四方がふさがっているという意味から由来する「周衣」（トゥルマギ）を着用するようになる。基本的に袍は古代より朝鮮時代に至るまで一貫して着用され、開花期の1884年の「甲申衣服改革」の際に私服は貴賤を問わず袖の広い道袍・直領・斂衣などは廃止となり、袖が細いトゥルマギが着られるようになったのである。元来トゥルマギは普段着であり、道袍の下に着る中着であったが、庶民はこれを外衣として着用していた。このように袍は高麗時代を経て朝鮮時代になると、特に男性の場合に儀礼的なものとなり、洋服の外套と違って、一年中着用するものとなっていた。



「パジ・チョゴリ」 「チマ・チョゴリ」

写真1 韓国の民族衣装の韓服

冠りものの冠帽（クワンモ）は時代によってその種類や名称が異なるが、形態的には大きく「冠」「帽」「笠」「巾」の4つに分けられる。冠帽の基本は巾にあるが、これに飾りなどがつけられ、多様なものへと発達した。冠は額に巻く部分の上に前から後ろへ連結するためのワタシが存在するものであり、帽は頭全体を包むものである。笠はつばがついているもので、巾は一枚の布で包む最も単純な形のものである⁷⁾。

おびの帯（テ）は動物の皮や布でつくられ、やがて革帯に飾り金具の銙（コア）をつけ、身分階級を表す象徴的な意味をもつようになる。古墳壁画などにみられるように三国時代は、身分階級によって帯の色が異なっており、飾り金具の銙をつけた銙帯が広く使われていた。高麗時代には革帯・束帯・鞆帯・糸帯・纏帯がみられ⁸⁾、朝鮮時代にまで受け継がれている。特に朝鮮時代の帯は官服に着用する「品帯」（階級を表す帯）の帯と普段着の平常服にしめる「布帛帯」（木綿や絹でつくる帯）の紐とに大別される⁹⁾。

履きものの靴（ホァ）と履（リ）は形態の違いから、長靴のようにクツの首が高くつけられているものが靴で、防寒・防湿に適した北方系のクツである。一方、履（リ）はクツの首が短いもので、南方系のクツである。靴と履を合わせて、現在は「シン」と呼ぶ。三国時代には履は主として貴族階級がはき、統一新羅時代には靴と履が併用されていた。高麗時代の初期には主に履が、末期には逆に靴が多用される。朝鮮時代には靴は上流階級のみ

許され、一般の庶民には履の「鞋」が代表的な履きものとして普及した。このようにクツは身分階級によって色や材料、形態も異なっていた。靴と履の材料としては革・布帛・糸・草・木・金属に至るまで様々なものが用いられている。

こうしてみると、韓国人の伝統的な上流階級のスタイルはパジ・チョゴリの上にトゥルマギなどの袍をはおり、腰に帯をしめ、頭には帽子をかぶり、足首の短い履きものをはくものである。

2 韓国服飾の衣料の種類とその変化

韓国の古代社会にはすでに種麻（麻の播種・栽培・収穫）と養蚕が普及し、麻布・絛布・縑布、そして絹織物も生産されていたので、織物技術が非常に発達していたことがうかがえる。三国時代には絹織物と麻織物をはじめ毛織物もみられ、織物の技術とその多様性を誇っていた。その代表的なものをみると、まず絹織物の「錦」は金と同じ重さで交換するほど高貴なもので、錦の字もこうした意味から由来する。錦は多彩な紋様が施されていて非常に高価な絹織物であったため、王族を中心に使われてきた。次に「苧麻」（「苧」・「紵」・「紵麻」ともいうが、ここでは「苧麻」と表記する）の繊維で織った生地であり、9世紀の新羅の重要な海外輸出品として知られる。苧麻は韓国の気候と風土に適した繊維植物であったので、古くから広く栽培され、それをういた織物（苧布）は朝鮮時代に至るまで、韓国の特産品のひとつとして数えられていた。

苧布に似たものとして麻布と絛布があるが、麻布は黄麻皮でつくる生地であり、絛布は棉花が栽培されていなかった古代には楮の皮でつくられていた。縑布は絹や麻などのいくつかの繊維を混ぜ合わせて糸をつくり、それを織った密度の高い細布であった。他方、毛織物としては様々な動物の毛を利用して織ったものが利用されていた。

すでに古代社会の三国時代に非常に発達していた織物と染色技術はその後の高麗時代に受け継がれていく。農耕社会であった高麗時代の主な産業は農業であったためか、国民経済と国家財政の収支は米と布によって行われ、米と布の経済時代だと言っても過言ではない。農家では「農者天下之大本」の勤農政策の下に稲作と穀物栽培を主業とし、養蚕や苧麻栽培、織物、牧畜の副業をもって生業としていた。したがって織物生産は農家にとって最も重要な副業であったのである。しかし、三国時代には織物を中国や日本などに輸出するほど発達していたが、度重なる外侵などによって輸出国から転落し、高級の絹織物の「紗羅綾緞」などは逆に中国から輸入していた。そうした状況の中であって、細麻布と苧布だけはいっそう発達し、献上品として、さらには中国などの輸出品として有名であった。

高麗後期になると、1363年に文益漸が元の使節団として派遣された時、中国から持ち帰った棉花によって、韓国の衣料史上に一大革命をもたらし、特に綿布は庶民階級の衣料として広く普及した。高麗時代には織物が家内手工業として発達し、苧布・麻布・絛布・綾羅・錦な

どが生産され、献上品として、あるいは商品として特産品化していく。

特に慶尚南道の晋州と慶尚北道の慶州は高価な絹織物のひとつである綾羅の産地として（写真2）、忠清北道の清州は養蚕の産地として、慶尚北道の安東は綿布（真絛）の産地として、慶尚北道の星州は黄麻布（麻布）の産地として、慶尚南道の南海は白苧布の産地として有名であった。また中央官庁には都染署・雑職署などの御用達の織物機関が置かれ、それぞれの専門の匠がいて、各種の織物を担っていた。中でも白苧麻は韓国の特産品として有名で、古くから中国や日本との国際貿易品のうちの重要な位置を占めていた。韓国の白苧麻は色の潔白さが玉と同じく美しいと評判が高かった（写真3）。やがて高麗末期に木綿が伝来すると、従来の絹織物や苧麻織物に加え、一般庶民の衣生活は飛躍的に豊かになってくる。



写真2 絹布のひとつである綾羅

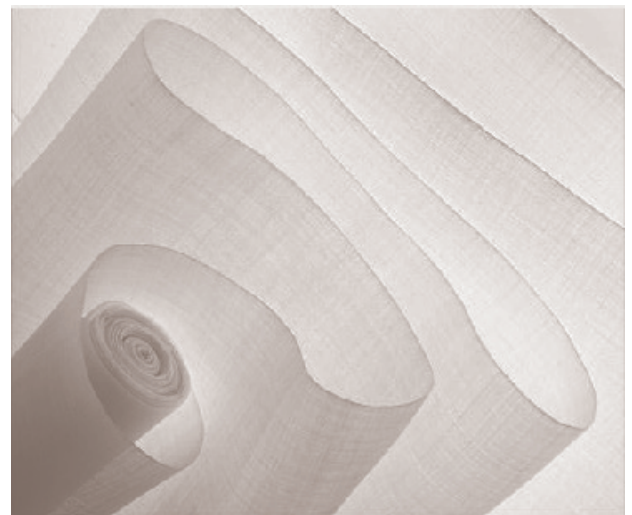


写真3 白苧の苧布

朝鮮時代に入ってから、織物は依然として手工業の域を出ず、大きな発展はみられない。それは、この時代に階級的身分制度が確立され、商工業に従事する者は賤視されていたからである。またこの時代には階級による厳格な服飾禁制がしかれていたため、高級衣料の生産を妨げる結果となり、その結果衣料・衣服の発達は停滞していたからである。しかし細麻布や苧布は中国への朝貢として、あるいは輸出品として知られるが、高麗末から

栽培され始めた棉花がこの時代に大きく発展した（写真4）。

朝鮮時代に生産されていた織物は、従来の紬や麻布・苧布に加え、新たに綿布の織物が登場した。高麗時代に発達していた高級の絹織物は姿を消し、粗悪な原糸からつくられる低級の紬だけが生産されていた。麻や苧麻に関しては細麻布と苧布がいっそう発達し、輸出品としても有名となった。麻の栽培は全国的にみられるが、後期になると北の咸鏡北道の会寧と鍾城が名産地となる。また慶尚道でも多くの麻布が生産され「嶺布」として知られるが、中でも安東で生産される「安東布」は今でも有名である。



写真4 綿布

これらの麻布は現在では喪服として重宝されている。他方、苧布は主に忠清道と全羅道の海岸地域で生産されていたが、後期になると忠清南道の韓山・舒川・鴻山・庇仁・林山・定山・藍浦が「苧布七処」¹⁰⁾と称せられ、苧布の名産地として有名であったが、後にそのうち「韓山」の苧布だけが全国に知られるようになる。木綿は既述したように、高麗末に中国からもたらされ、慶尚南道の晋州の丹城で栽培され始め、一気に全国へ普及して韓国衣料史上に大革命をもたらした。15世紀の綿業は塩業と鋳業とともに朝鮮時代の三大基幹産業のひとつとして数えられ、その綿布は租税の一種ともなり、麻布に代わる代表的な貨幣としての機能を果たすようになる。しかし、後期になるにつれ、綿布は過重な賦課により衰退する。

3 衣服の伝統と変化

三国時代以来、韓国は韓国固有の服飾と中国の服飾の二重構造の下で発展してきた。一般庶民の服飾は昔も今も朝鮮時代までは変わりがなかったが、官服は中国服飾の影響が大きい。その特徴は男女服の外衣と內衣が今日の伝統的な「韓服」の姿に整えられた。男性服においては、まず笠制が確立し、袍制も官服の団領とは異なる、高麗時代の直領としての袍（白苧袍）が道袍→警衣→周衣（トゥルマギ）へと変化した。女性服においては、その保守性が強く、統一新羅時代以来の唐の影響による「円衫」や「唐衣」（写真5）が今日に至る。その他、女性服には複雑な肌着の襦衣類が発達している。

特に身分制度が確立していた朝鮮時代には、服飾そのものが階級性を帯びたもので、これが上下・尊卑・貴賤の二元的構造をなしていた。それはおおむね庶民や賤民

に対する服飾禁制としてあらわれる。庶民は韓国固有の基本型のうちパジ・チョゴリが一般的であって、派手なものや、絹衣・紋様衣・染色衣などは許されず、それが韓国民族を「白衣民族」と呼ぶ所以でもある。庶民の男性服装の基本構造は、パジ・チョゴリである。古くは、チョゴリは高句麗の古墳壁画にみられるように垂直型の長いチョゴリに帯をしめるが、統一新羅時代に中国の官服、すなわち外衣として足首まで長く帯を締める「袍」が導入されると、チョゴリの丈は短くなって交衽型に変わり、帯はオッグルム（結び紐）に変わる。そして、高麗時代のチョゴリは蒙古服飾の影響を受け、ゆったりしていた袖が狭くなり、丈の長さも一段と短くなる。特に女性のチョゴリは朝鮮時代になると、極端に丈が短くなるという特徴がみられる¹¹⁾。高麗時代は新羅の文化をベースにして築かれたが、政治的には北部の高句麗の後継者あるいは復興者であって、北方民族との争いが続いた。中でも、蒙古族の侵略を受け、1259から80年間に及び間、蒙古族の元の干渉を受けることになるが、その間、服飾に与えた影響も少なくない。そのため、一部では開剃弁髪し胡服を着ることが余儀なくされたのも事実である。しかし大多数の庶民たちは、韓国固有の服飾を着ていたことはいままでのない。一方、パジは「大口袴」と「窮袴」があって、その基本的な形は変わりが無い。しかし、庶民階級は大口袴よりは生業活動などに便利で、生地節約にもなる窮袴が着用された。そして、パジの足首はしめくくるための紐の「テニム」がある。このようなパジ・チョゴリに履きものの「ボソン」（靴下）と「シン」（靴）を履く。また庶民は冠物や袍類の着用において、その種類などが限られていた。



写真5 伝統婚礼の円衫とチョゴリの上に着る唐衣

朝鮮時代の庶民の衣服は、世宗31（1449）年正月に出された禁制の中からうかがい知ることができる。それによると、「庶人・工商賤隷は直領・袂注音帖裏を通着する」とあって、直領と帖裏が庶民服であることがわかる。直領は衿が直線の袍の種類で、衿が丸い「団領」は朝鮮時代に官服となっている。他方、帖裏は上衣とわよせの裳が繋がった形の袖が広い直領交衽式の袍である。朝鮮時代の庶民服は当時の官服のうちの便服と好対照をなす。支配階層（両班）の普段の服装である便服

は、冠帽と袍制にその特徴がみられる。典型的なスタイルは頭に「カッ」（黒笠）を被り、パジ・チョゴリの上に外衣の袍を着る。袍には帖裏・直領・道袍・警衣などがあつたが、やがては周衣（トゥルマギ）に変わる（写真6）。

朝鮮時代の女性服装の基本型はチマ・チョゴリであり、その構造的変化は認められない。しかし丈や襟には幾分の変化がみられる。女性の髪は、既婚女性のあげ髪・まげ髪、未婚女性の辨髪・束髪などであった。そして男女区別の内外法の厳しかった朝鮮時代には、女性の外出時に顔を隠すために頭から被る「長衣」などが存在していたのは特記すべきことである。女性の場合、普段の服装（平常服）は上流階級も一般庶民の女性も大きな差は認められない。朝鮮時代の男性の官服制度は中国の服飾制度を襲用していたが、女性服は韓国固有のものを固執していたのである。女性服の基本構造は上述した通りチマ・チョゴリであり、これは古来より変化がない。ただし、チョゴリの場合、その丈が尻まで届くほど長く、袖が中国の影響を受けて広くなり、帯を締めていたのが、蒙古の影響を受けて丈は短く袖は細くなり、帯の代わりに前を合わせて結び紐の「オッゴルム」で結び止めるようになった。女性服における中国の影響は、チマ・チョゴリの上に着る外衣の翟衣・露衣・長衫・円衫・褙子・唐衣¹²⁾など、チマの膝襪・大欄チマ、冠帽の簇頭里・花冠などにみられる。



写真6 伝統的なスタイル韓服（東萊鶴舞より）

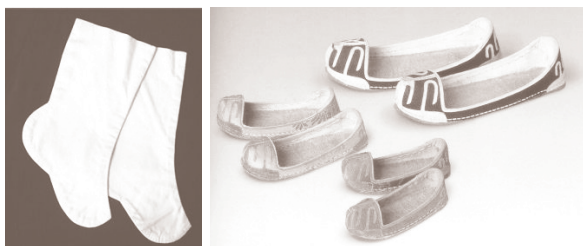


写真7 ボソンと温鞋

当時の女性服の基本スタイルは被りものの蓋頭にチマ・チョゴリ、チョゴリの下に着る上衣の下着である襖とチマの下に幅の広いズボンの下着である裾に、靴下の「ボソン」（襪）、履きものの温鞋（草鞋）の姿になる（写真7）。このうち高麗時代と異なるのは、チョゴリが蒙古の影響を受けて丈が一段と短くなり、チマも肌着など合わせて7～8重と重ね着していたのが、外衣の内側に襖を着用するようになって、これが典型化する。女性の普段着は礼服の内側に着るものと同じスタイルである。女性の礼服はチマ・チョゴリの上に外衣の円衫あるいは唐衣を着る。チマは飾りを施した膝襪・大欄チマを着用する。したがって女性の普段着はチマ・チョゴリであり、これに靴下のボソン（襪）と靴のシン（鞋・履）を履くのが典型的なスタイルである。

以下では、韓国の伝統的な服飾の変化と現状を知るために、忠清南道舒川郡の苧麻の「韓山モシ」を取りあげよう。

4 韓山モシの現状と技術伝承

(1) 地域の概況と歴史的経緯

苧麻（モシ）は忠清南道と全羅道などのきわめて局地的に栽培されてきたが、中でも「韓山モシ」が有名である。韓山モシは忠清南道西南端の西海岸（黄海）と接する舒川郡一帯で生産される。舒川郡の行政区画は2邑11面から構成されており、苧麻織りで有名な韓山はそのうちのひとつの面である。舒川郡は地理的景観から南西部の穀倉地帯と北東部の丘陵地帯に分かれるが、南端には韓国4大河川のひとつである錦江が流れ、その河口域は内浦平野と湖南平野に連なる有数の穀倉地帯を形成している。舒川郡の西と南側の海岸はリアス式海岸で干潟と砂浜が発達しており、天恵の養殖地（主に海苔養殖）をなしている¹³⁾。



写真8 苧産八邑機織ノリ

そのため当該地域は、古くは百済の軍事的・経済的要地であつたし、日本植民地時代の1929年には干潟を埋め立てた長項が開発され、精錬ができ、日本兵站基地にもなつた。錦江を挟んで向かい側には群山港¹⁴⁾がある。舒川地方の特産品は「韓山モシ」と「韓山素穀酒」であり、文化財としては宝物224号の「庇仁五層石塔」と忠清南道無形文化財第13号の「苧産八邑機織ノリ」（1991）である。苧産八邑機織ノリは百済時代から伝承されてきた舒川の固有の民族ノリ（遊戯）である（写真8）。

苧布の機織りで有名な苧産八邑（八力所の街）とは韓山をはじめ、舒川・庇仁・林川・鴻山・藍浦・保寧・定山をさす。舒川郡の主要農産物は南西部沖積平野の穀倉地帯からとれる米であるが、北東部丘陵地帯では栗・苺・胡桃・棗・銀杏・葉草などが生産されるが、ほとんどは栗である。また北東部丘陵地帯の板橋・文山・時草・馬山・韓山・華陽の一带では苧麻が生産されていた。北東部丘陵地帯は水田が少なく、苧麻の栽培や苧布織りが重要な生業のひとつになっていた。この一带は海から吹き付ける塩気を含んだ海風と、栄養分の豊富な肥沃な沖積土質に栽培される苧麻は丘陵の谷間を通り抜ける風などの風土的好条件によって、良質の苧麻が生産される。したがって舒川郡地域は土壌と気候、地勢に恵まれた苧麻栽培の最適地である。

現在、舒川郡は1990年代2000年代になって、地域発展の戦略を成長一辺倒から親環境的開発概念に転換し、アメニティーを通じた環境性の回復、快適な環境造成、人間生活の質の向上のための変化が進められ、その一環として韓山モシの保存と継承に力を傾けている。

(2) 韓山モシの特徴

織物は「升」数によって美しさ・きめこまかさの程度を表すが、1升は経糸80本である。この升数の多少によって、多いのは細苧布、少ないのは中苧布、そして粗苧布とに区別される。現在までに調査報告された苧布服の遺物のうち、もっとも繊細な細苧布は朝鮮時代の出土服飾の中に14～5升（幅31cmの経糸1160本）のものと、海印寺の僧服13升（幅31cmの経糸1040本）の苧布服である。

歴史的にみると、高麗時代には苧布が王様の便服（普段着）から一般百姓に至るまでの日常の普段着として普遍化されていた。特に女性たちは夏用の長衣と苧布チョゴリを、黄色のチマの上に好んで着ていた。また高麗時代の苧布織りは国の奨励政策によって全国的栽培が普及し、それを国の租税品として徴収した。そのため苧布は衣料としてのみならず、貨幣としての価値も認められ、国の経済基盤を固める主要な交易品のひとつになっていた。

朝鮮時代になると、苧布服は主に「ソンビ」（両班）たちの外套である袍やトゥルマギなどに好んで用いられた。その理由は苧布服がもつイメージが、当時の儒学者たちの気性を引き立てるのに符合するものであったからである。古文書によると、苧布の材質美を雪や玉、あるいは蝉の羽のように白く・透け、清く・涼しく・清潔なイメージで表現されている。このように、苧布は素朴・繊細・端麗・清雅な服飾美のさわみとして、韓国民族がもっとも重宝してきた夏用の高級織物である。朝鮮時代の苧布は高麗時代と同様に、外国の使臣や功臣たちに授ける下賜品としても用いられた。苧布は夏用の衣料として、特に外出用の外着や儀礼用の袍類として、そして女性たちの肌袴などに愛用され、喪服や軍服にも使われた。他方、その切れ端は集めてひとつずつつないで風呂敷にして利用した。

また朝鮮時代には、苧布が中国や日本との交易品、貢物や租税品として貨幣価値が認められた地域特産物とし

て発達した。その流通は朝鮮時代の御用商店のひとつであった苧布塵を中心に活性化されていた。この時代には身分や用途によって、苧布の升数の規制があった。当時の品質は10～15升の上質（高級衣服用）¹⁵⁾、一般の衣料としては6～7升または8～9升が使われた。品質が悪いのは5升以下のもので、普段着や喪服用に用いられた。

現在、舒川郡韓山地域の苧布織りは細苧布を織る人と、中苧布を織る人とに分かれており、両方が織れる人はいないという。その理由は、昔から地域によって細苧布を織る地域と中苧布を織る地域とが分化し、固定していたからである。韓山地域の細苧布織りで知られているのは最北東に位置する華陽面を中心に生産されている細苧布である。現在の最上級は、幅29～36cmの12升の苧布である。次に苧布織りの諸工程について簡単にみることにしよう。

(3) 苧布織りの工程

苧布織りの製造過程はおおむね、①苧麻栽培、②テモシ作り、③モシチェギ、④モシサムキ、⑤モシナルギ、⑥モシメギ、⑦クリガムキ、⑧モシチャギの8の工程からなっており、そして、それを用いて⑨苧布服を仕立てることになる。

①苧麻栽培

苧麻は多年生の繊維植物であり（写真9）、幹の長さは1.5～2.0m程度、太さ約1.2～1.5cmで、およそ10年間にわたって毎年3回ほど収穫する（1回目は5月末～6月初め、2回目は8月初め～8月末、3回目は10月初め～10月末）ことができるが、5年目がピークで、その後は収穫量が減っていく。



写真9 苧麻（モシ）

②テモシ作り

収穫した苧麻の皮を剥ぎ取り、さらに外皮を剥ぎ落として内皮と分離した後、繊維となる内皮を水に4～5回さらして天日干しにして苧糸の「テモシ」をつくる（写真10）。



写真 10 テモシ (苧糸)

③モシチェギ

モシチェギの工程は苧糸のテモシを口（歯）で唾をつけながら細かく割いて、繊維の太さを一定にする過程である（写真 11）。この工程で苧布の品質が決まると言っても過言ではない。特に苧布の品質は苧麻自体の品質とこのモシチェギ（苧麻割き）工程の熟練度によって左右される。



写真 11 苧麻割きのモシチェギの工程

④モシサムキ

モシサムキの工程はモシチェギ工程で細かく割かれた苧糸を、1本ずつ両端を膝の上に乗せて手の平でよりをかけながら糸をつなぐ過程である（写真 12）。



写真 12 モシサムキの工程

⑤モシナルギ

モシナルギの工程は1本の糸につなげた苧糸束（「モシクッ」と呼ぶ）10束をひとつにたばねて縦糸通機にかけて、1疋（1疋は地域によって異なるが、幅29～36cmの長さ36尺21.6m）の長さにあわせて、縦糸の数をそろえる過程である。一般に7～8疋の苧布を織るのに経糸10のモシクッと紡ぎ糸8のモシクッが必要となる。

⑥モシメギ

モシメギの工程はそろえた縦糸を温めながら、糸のつなぎ目をなめらかにするために、豆粉と塩を水にうすめてつくった糊を縦糸に塗りつける工程である（写真 13）。この工程はふつう早朝に太陽が登る前に行われる。



写真 13 モシメギの工程

⑦クリガムキ

このクリガムキの工程は横糸の紡ぎ糸をつくる過程である。15cmほどの棒に時計方向に巻き付けてつくる。杼（韓国では「ブク」と呼び、日本では「シャトル」とも呼ぶ）に入る大きさになるまで苧糸を巻き付けると中の棒を抜いて、糸束をつくる。

⑧モシチャギ

モシチャギの工程は最後に織機を利用して苧布を織る工程である。伝統的な織機は扱いにくく（写真14）、現在では改良機を使っている（写真15）。苧布の1疋は幅29～36cm（地域によって異なる）の長さ21.6m（36尺、1尺=60cm）となる。しかしごく最近まで15升の細苧布を織ることができたが、今では12升の苧布が最上級である。

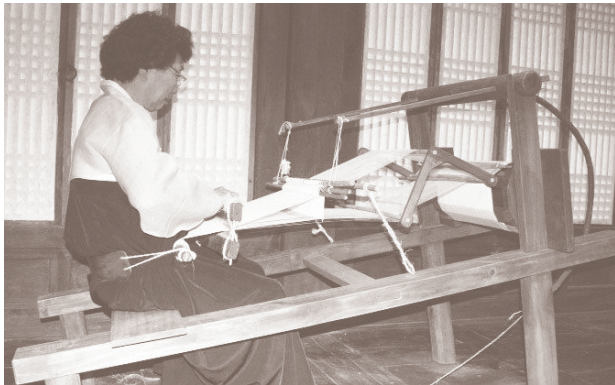


写真14 モシチャギの工程（伝統的な織機）



写真15 モシチャギの工程（改良機）

⑨苧布服の仕立て

苧布の流通は、韓山面の中に形成されている商家と在来の定期市（5日市）で取引されており、特に芝峴里の苧布市場が有名である。苧麻はおおむね栽培農家と苧布織り農家とにそれぞれ分業化されている。そして、苧布服の仕立屋も異なるが、仕立屋は苧布市場の近くに並んでいる。仕立屋は注文を受けて仕立てるものと、仕立てた完成品を売る場合とがある（写真16）。



写真16 苧布服

（4）韓山モシの技術伝承

ここでは、韓山モシの技術伝承についてみるために、韓山モシが取り入れている韓山モシの地理的表示制度と新しい組合について考察する。現在、全国のモシはほとんどが韓山モシ組合の検査を経て韓山モシ市場を通じて取引されている。モシ生産者は苧布の疋モシを韓山モシ市場にもってきて韓山モシ組合の規格検査を受けた後、仲買人によって値段がつけられ、販売されていく。この仲買人による流通システムは日本植民地期から続いているものである。こうした流通システムは生産者から消費者の手にわたるまで、仲買人・卸商・小売商など少なくとも3段階を経ることになる。こうした重層的な流通システムによって、生産者は高値で売ることができず、また消費者は安く買うことができなかった。特に最近韓山モシ市場から外部の卸商が姿を消してしまったので、現存の仲買人はモシの値段を決めるとともに自分自身が卸商の役割も担うようになった。そのため、モシ生産者は自分たちの利益を守ることができなくなった。

他方、1990年代から安い中国産モシが大量に輸入され、韓山モシ生産に大きな衝撃を与え、一部の商人と苧布生産者は中国産のモシクックを購入して疋モシを織って韓山モシと偽って売ったりすることも起きている。そのため、韓山モシ生産者に甚大な損害を与えるだけでなく、「韓山モシ」というブランドに傷を付けるものであった。こうしたことから、地域特産物としての韓山モシのブランドを守り、モシ生産と流通システムを改善すべく、地方行政の舒川郡は2003年から韓山モシの地理的表示登録制度を導入し、その制度を具体的に実行する団体として2006年6月に社団法人韓山モシ組合（以下、「社）韓山モシ組合」と表記する）を設立した¹⁶⁾。

この新しい（社）韓山モシ組合は2006年12月に韓山モシが地理的表示登録をする際に登録申請者となった（写真17）。地理的表示登録の対象商品は苧布の疋モシで、登録名称を「韓山モシ」とし、あわせて対象地域の範囲を忠清南道舒川郡とした¹⁷⁾。すなわち韓山モシの地理的表示登録後の忠清南道舒川郡で生産し、（社）韓山モシ組合を通して流通される苧布のみがはじめて「韓山モシ」という名称を使うことができる。それ以前

は生産者が舒川郡居住者であれば、すべて「韓山モシ」と名乗ることができたが、地理的表示登録後は舒川郡以外で生産された苧布は「韓山モシ」と名乗ることができなくなった。それだけでなく、旧韓山モシ組合が管掌し韓山モシ市場を通して取引される苧布までも認められなくなった。地域特産物が地理的表示登録になると、当該農産物の生産および加工において「加工品の地理的表示登録のためには、何よりも重要なのが正当性の確保と希少価値及び品質の差別化をはかるには当該地域内で生産されたものを使用」することが要求されるからである¹⁸⁾。

一方、(社)韓山モシ組合は組合から苧糸のテモシを購入してつくった苧糸束のモシクツのみを買い取り、これを再び苧布生産者に預け、労賃を払って苧布を織ってもらう。すなわち(社)韓山モシ組合から購入したテモシで作ったモシクツや、(社)韓山モシ組合で購入したクモシでつくった苧布のみに韓山モシ地理的表示登録を与える。こうした原材料から完成品に至るまですべてを(社)韓山モシ組合が管理するシステムは韓山モシの原産地の信頼性を保障してくれるものとなっていた。さらに、こうした方式は韓山モシ市場で苧布を織るモシ生産者たちが直接仲買人と取引する際に起こる不利益の問題を解消することができた。現在、(社)韓山モシ組合は原材料の共同購買および苧布の契約買い取りなどの方法によって、苧布のみならず原材料や道具の販売、苧布の流通に至るまで、全過程に主導的機能を果たしている。しかし、(社)韓山モシ組合は韓山モシの地理的表示登録を主管しているため、今後(社)韓山モシ組合の生産および流通方法に従わなければ、当該地域住民が織った苧布であっても韓山モシとして認められなくなる恐れも孕んでいる。



写真 17 (社)韓山モシ組合

こうした生産者の原材料購入および製品販売を強制的に共同購入・販売のやり方はすでに日本植民地時代の朝鮮総督府が推し進めたことがある。当時にも生産者をためだといわれたが、すべて生産者に有利に働いたわけではなかった。こうして生産者たちが(社)韓山モシ組合を通じて原材料を共同購買し、製品をも共同販売すると、生産者たちの自由度は失いかねない。いずれにせよ、舒川郡の積極的な後押しによって今では新しい韓

山モシの生産と流通システムが構築されている¹⁹⁾。

おわりに

韓国は古くから「東邦礼儀之国」と知られるが、それは衣冠に強く現れており、これを尊重してきた。普段の日常生活のくつろいでいる時でも冠をかぶり袍を着用するのが、士人としての身だしなみとされてきた。韓国固有の服飾は男性の「バジ・チョゴリ」、女性の「チマ・チョゴリ」の上に外衣のトゥルマギを着ると、伝統的な衣裳のおおよその姿が出来上がる。こうした伝統衣裳に、古来より中国の服飾が導入され、王はもとより、両班の士大夫や、中人の下級官僚あるいは軍役者などがすべて中国式の官服を着用して、衣生活の上で二重性をもっていた。しかし役所では中国製の官服を着用した官吏層も、家庭に帰ると日常的には昔ながらのバジ・チョゴリの姿でくつろぐ。そして1910年からの日本による植民地支配や朝鮮戦争後の近代化の中で、旧来の官服制度は完全に姿を消し、礼服・平常服ともに西洋化がはかられ、今度は伝統と西洋という二重構造が形づくられてきた。

韓国は衣料の面からみると、古来より紬(絹)・苧・麻・葛が利用されてきた。現在、天然繊維素材として継承されているのは、紬(綾羅・錦)・麻(麻布)・木綿(綿布)、そして苧麻(苧布)に限られる。これらの衣料は古くは献上品として、あるいは商品として特産品化してきた。しかし素材の面での「木綿革命」(14世紀中国から伝来)、さらには「化学繊維革命」(1960年代以降)を経て、固有の天然繊維素材の衣料は敬遠されたり周辺化されたりして停滞した。細苧布で有名な韓山モシは、伝統的には当該地域の重要な生業の一角をなしてきた。しかし1960年代の化学繊維の導入によって、苧麻はもちろん天然繊維全体が衰退を余儀なくされた。1966年頃まで苧麻は、舒川郡一帯で3万3千町に栽培され3700万トンが生産されていた。その後は急減し、1975年には600余町から1000トンまで落ち込み、近年では6トン弱しか生産されていない。

そのため、韓山モシの保存・継承のために1989年から「韓山モシ文化祭」(写真18)を開催し、1993年に「韓山モシ館」(写真19)を建立して伝統の織物文化の保存と継承を図っている。現在、韓山モシ館には苧布素材の生活用品や苧布服などが展示され、また機能保持者が機織り試演場を運営しており、苧布生産の全工程をみることが出来る。なお、「韓山モシ」は2011年11月にユネスコ無形文化遺産に登録されている²⁰⁾。



写真 18 韓山モシ文化祭



写真 19 韓山モシ館

注

- 1) 柳喜卿・朴京子 (1983) によると、韓国の服飾文化史を綴るのが、今のところ冒険だといながら、服飾は人間生活のひとつの直接的な表現であるため、これにはその時代の社会相と文化相が必ず反映されているという。
- 2) 襦は襦と袍 (後述) などの領 (ひれ)・衽 (おくみ)・裾・袖口に縁取りのようにつけたものである。襦は縁を補強するためもあって、男女貴賤を問わずつけられていたが、やがて飾りとして修飾の意味が強くなっていく。
- 3) この結び紐を「オッコルム」あるいは「コルム」といい、チョゴリや外衣のトゥルマギ (周衣) の前に付け、裾を正す紐である。
- 4) 『三国史記』は 1145 年に金富軾等によって編纂された紀元前から 7 世紀までの三国時代の正史である。
- 5) 今日の「バジ」という名称は、朝鮮時代の鄭麟趾が「把持」(バジ) と記したのが最初で、後に「バジ」に変わるが、これは「チョゴリ」に対応して変わったものとみられる。
- 6) 「帖裏」とは上衣と下衣を別々に作ってつなげたものをいうが、「直領」とは直線衿の袍 (外衣) をいい、「道袍」は道服に似た通常の礼服で、「髦衣」は朝鮮時代の士大夫や庶民が着た丈が長い上衣の外衣である。
- 7) しかし、これらの形態は明確に区別されるものではなく、相互に錯綜することも少なくない。
- 8) 束帯は飾り金具の銚をつけ、両側をつなげるようにつくられたものであり、鞆帯は布で帯の形に作り、その上に革をつけ、長方形・方形の銚をつけたものである。また糸帯は糸でつくる帯で、纏帯は長い布を巻き付けながらつくる帯である。
- 9) かつての帯は身分階級によって材料や色が異なっていたのである。
- 10) 「苧布七処」あるいは「苧産八邑」ともいわれるが、苧産八邑については後述する。
- 11) 現在の女性の韓服のチョゴリはこの極端に丈が短いものを継承している。
- 12) 翟衣とは王妃や世子妃が着る礼服で、露衣は王妃や高官婦人の礼服である。長衫は下級官僚の奥さんが着る礼服で、円衫は宮中の小礼服で、支配階層の大礼服であると同時に、一般女性の婚礼服でもある。襟子はチョゴリの上に着るボタンがなく短いチョッキのようなものであり、唐衣は宮中女性の小礼服や普段着である。
- 13) 西海は海が浅く干潟が発達していて、牡蠣・しじみなどの貝類の養殖と海老やクロソイなどの魚類の養殖も行われている。
- 14) 群山港は 1899 年に開港され、当時は米流通を中心とする貿易港であったが、現在では貿易港としての機能は失われた。
- 15) 『朝鮮王朝実録』などの古文書によると、朝鮮時代の最高上質は明への貢物で、15 升・16 升のものがあった。
- 16) 1999 年「農水産物品質管理法」に地理的表示登録制度を初めて導入したが、その目的は地理的特性をもつ優れた農産物および加工品の品質向上と地域特化産業としての育成、そして消費者にその情報を提供し、生産者および消費者を保護する目的であった。「農水産物品質管理法」施行令第 17 条によると、地理的表示登録を申請できる資格は「特定地域内で地理的表示の登録対象品目を生産・加工する生産者団体または加工業者からなる団体 (法人) に限る」として、申請者団体の条件は「農水産物を共同で生産し販売・加工または輸出するための専門生産者組織として長官が定める条件を揃えた団体」としている。
- 17) 新しい組合ができる以前、韓山モシの販売を牛耳っていた組織は旧韓山モシ組合であったが、主に仲買人を中心に運営されてきた。そのため、韓山モシ組合は法が求める「特産物の生産および販売」、そして「専門生産者組織」などの条件に符合しなくなった。そこで、舒川郡は一部のモシ生産者からなる (社) 韓山モシ組合を新しく設立するに至った。
- 18) 舒川郡は数年前から郡内で苧布原料の苧麻栽培を支援し、全羅道の苧麻使用を避ける努力を続けてきた。
- 19) 今後はこのシステムによって技術伝承がはかられることになる。
- 20) 本研究の一部は日本学術振興会 (基盤研究 (C)、平成 23-26 年度学術研究助成基金助成金) の研究費の交付を受けて行われたものである。

参考文献

柳喜卿・朴京子 1983 『韓国服飾文化史』 源流社
 金文子著・金井塚良一訳 1998 『韓国服飾文化の源流』 勉誠出版
 国立国語院編、三橋広夫・趙完済訳 2006 『韓国伝統文化事典』 教育出版株式会社
 林在圭 2010 「韓国における韓服の伝統とその特徴」『アフラシア』 no.7
 林在圭 2010 「韓国の伝統衣料における近代化の過程」『アフラシア』 no.8